

史學に於ける價值説の崩壊(一)

小林 秀雄

( 1 )

前世紀の半頃、觀念的哲學は經驗科學以上のものを與へ得ないといふ懷疑的な穢氣分が濃厚になつて、觀念哲學が危機に陥つた時に、之を救済したものは認識論であつた。この認識論なるものは、結局總ての實證主義に共通してゐる知識形式の研究である。認識論の勃興によつて眞面目に人間認識の達限、限界並に有効價值の問題、つまり吾人の現實觀念の根本原因の探求が生じ、而してこの思想圈からして哲學作業に向つて個體的認識を批判的に追及し、實證科學の方法、目的並にその思考形式、重要原則を選出して、之を論理的價值の支配的常規に照すといふ問題が起り、かくて今日了解さるゝ

如き哲學的方法學が科學的理論として一般論理學を離れて特殊なる哲學的分科を成するに至つた。

この認識論は自然科學の上には有力な効果を齎したが、同時に精神科學の上にも非常な改作を行つた事は明白な事實である。然し歴史認識の問題は常に方法的説明の中心を爲せるに拘らず、之が未だに其解決に達したとは考へられないのであり、其間に於いて一般狀態が著しい變化を示してゐる。

アリストレス以來、科學は根本的に普遍性を求むることにて其任務となし、歴史は個體を取捨ふが故に、科學的性質を有せざるものとして認められた。最も歴史家は歴史が科學なりや、否やに關係なく、それぞれ特殊の動機よりして歴史を書き、讀者の興味を豫定すべきものを物語つて居り、彼等は此際好んでその理性觀念によつて歴史的となれるものを觀察してゐるのであつて、彼等に明瞭な選擇の眼點を供したものはこの理性觀念であつたといひ得る。然るに科學の進歩に伴うて史家の間に歴史的個性も普遍性と相對して科學的權利を有し、之を非合理的と稱ふ可きに非ず、寧ろ十分に合理的なものであるといふことを承認し初めた。而して彼等によれば、之は個體的理性の思惟によつて捕捉されるべきではなく、歴史の中に開展する創造的、宇宙的觀念に基く製産物であるから、合理的であるといふのである。かくして歴史は完全に意識的に、個體的事實の無限なる量を認識せねばならないこととなるが、この場合ヘーゲルは個體的理性の思惟方法よりして歴史的集合理性の本質に侵入し、か

くて之によつて歴史事件の秘密を開くならば、完全に、また迅速にその目的に到達し得られるに相違ないといふ意向に到つた。然しヘーゲルは豫定した個體理性と歴史的理性の同似、また歴史に於ける有力な世界力の支配に關する先驗的な説明を企て居らず、一方歴史的方向をば世界力の本質中に直接に洞察し得ると信じたのであるが、宇宙的、歴史的理性をば自然的過程・法律・道德・言語・傳説・詩・藝術・神話等に展開されてゐる民族精神の或系類に區別せんとする學説は全く志想であり、他方複雑してゐる集群の中より科學的に個々のものを捕捉するといふ問題は依然解決されずに残つてゐる。この狀態よりして歴史的觀念説が発生した。

ウイルヘルム・フォン・フンボルトはこの新しい史學派の開拓者の一人と見るべきもので、彼は事實材料の研究のみが歴史認識を作り得ることを知つた完全な経験家であり、また彼は明かに「歴史に全體の關係の研究については生きてゐる多數の個體中の或者を犠牲とせねばならない」ことを警告してゐる。然し彼は實際歴史の識者として、現象上に現れる歴史的勢力をば事實の中に求めずして、却つてその背後の性質上有限の範圍外に存在して、世界史の總ての部分を支配してゐる「イデー」に遡るもののみを有効ならしめてゐる。然かもかゝる神秘的、超個體的勢力なるものは結局天才的直覺にのみ到達し得られるのであるといふことは言を俟たない。

近代歴史科學の特有な建設者で、自然フンボルトに出てゐるレオポルド・フォン・ランケがかゝる

( 4 )

困難な位置に於いて、如何にして既に早く確實な、正當な道を發見するに至つたかは、何人も非常に不思議に感ずる所である。彼の方法的計畫は人事を知るが爲には、二つの道があるといふのである。即ち個體の認識と抽象の認識とである。その一方は哲學の道であり、他の一方は歴史の道である。かくして歴史家も事實の莫大なる集合から普遍性を止揚せねばならないが、觀念的普遍と歴史的普遍とは全然違ふ。歴史的研究は時々その問題としてゐる特別な對象をばその包括的な全體、即ち民族及び時期に、又民族及び時期をば最後の包括的な全體、即ち世界史なるものに結合することに努力するのである。常に之を種々な關係、結局それらの總ての階段に於いて一定の關係を有する様に取出さねばならない。而して之は指導的イデーの捕捉によつて到達されるものである。かくてランケに取つてはイデー其物が最早歴史的勢力の作用の後に存在する神秘的な本質ではなく、歴史時期の主要傾向に外ならない。かくして彼は歴史的普遍化の根本任務は歴史的事件の個々の材料よりして世紀の支配的傾向への向上であると認めてゐる。

然しその間に、選擇問題が他の地盤、即ちフランス、イギリスの社會學者の思想範圍に現れて來た。こゝに發見された解決は非常に特徴がある、フランスとドイツとのロマンチックが分つてゐる假定、即ち歴史的世界は人間の社會の集合精神の產物及び歴史的事件の支持者であつて、總ての場合に之が集合的主體である所から、歴史研究の根源的對象及び歴史の支配的要素は群集現象であるといふ集合

的理論を生むに至つた。その上に今歴史研究を以て自然科学に明白な先例を與へてゐる科學の程度に高めんとする熱烈な精神が現れて來た。然し之によつて歴史をば歸納的科學に、歴史を個々の材料から普遍性及び合理性を引出す科學に作り上げる以上のことが成され得るや、いかに。之に就てはバツクルの歴史理論が明白に示す如くに、之が集合的歴史觀察を自分から束縛することとなる。それは個々の事實に於いて普遍性を捕捉する比較的抽象によつて集合現象を解釋するものであるからである。かくして歴史は特に科學たらんとする場合、法則科學にならねばならないと考へられる。

近來カルル・ラムブレヒトが之と類似した道を歩んでゐる。彼の屢々争はれた方法學的思察は實際こゝに重大な問題の存在を指示してゐる。彼も歴史を科學の列に昂めることの必要と、また歴史が事實の正確な決定を行つてゐないことを考へた。彼によれば事實は疎雑な無形式な集群であり、その改作によつて初めて科學たるものと考へた。然しラムブレヒトの不幸はかの古いプラトンの、アリストテレスの通見に固着してゐることであり、彼にも單に一般性の認識のみが科學と考へられたのである。かくて彼は科學的史家に對して、再び事實材料に於ける區別、類型及び法則を求むる問題を課したが彼は集合的歴史觀察の地盤に立つ關係よりして、その歴史科學的方法是當然、比較的觀念的抽象であつた。彼はこの結果として、常に同様な文化時代の連關の中に永在的合法性を以て流れてゐる民族の類型的發展を認めた。然しラムブレヒトは直ちにかゝる發展を規定する社會心理的要素を示さんとす

( 5 )

（ 6 ）  
るや、彼には歴史が社會心理的科學、實に應用心理學となる。而して之に反して個體其物をば非合理的と見、之は單に藝術的に捕捉さるべきであつて、從つて歴史科學に於ては只二次的に觀察さるべきものと考へた。

一般社會學者の間にも、彼の集合的單位、即ち民族及びその内的な發展的必然性に關して餘りに輕率な抽象が行はれ、また間違つた實體化が行はれてゐることを認めてゐるが、この非常に有力な衝動を與へた彼の比較歴史觀察法には精神科學の研究にとつて重大な問題の存することを忘却すべきでない。ラムブレヒトの方法及び研究結果は、どう考へてもよいとして、法律・習慣・言語・宗教・藝術・經濟的及び國家的生活の内的本質を理論的に理解せんとする人に取つては、かゝる文化現象の發展を種々な文化圏に於いて比較しつゝ追及するより方法はないと思ふ。かくて彼には文化生活の特殊部分或は全體に働く創造力の洞察が歸納され、而してこの研究がその認識法を心理學に得ねばならないことは何人も拒むべきでない。實際、比較的觀察は心理學を基礎としてゐる精神科學の理論の根柢であるが、吾人は歴史其物が比較的歴史觀察でないことを考へねばならない。歴史は精神科學の理論ではなく、從つてラムブレヒトのいふ如き社會心理學でもない。つまり心理學的能力及び知識は歴史家に非常に重要であり、また缺く可らざるものかも知れないが、歴史は應用心理學ではない。ラムブレヒトを指導してゐる科學的觀念は寧ろ彼を特有の歴史から遙に遠ざからしめてゐる。

歴史を精神科學たらしめんとして之を精神科學的位置に昂めんとする試は、單に紛糾を大ならしむるのみで、何等解決とはならない。この場合、只歴史が個體的なものをかゝるものとして取扱はねばならないといふ問題がある。而して歴史的事實材料の科學的な改作は觀念的、抽象的改作とは違つた種類でなければ、結局總ての科學的認識が觀念的普遍性に向けられるとすれば、歴史は科學たる要求を捨てねばならないことになる。この結果については哲學的理論家も勿論、歴史家は十分な意識を有つてゐない。彼等は單に個體的なものの改作は藝術的作業に外ならないといふ點ではラムブレトと一致してゐるのである。彼等によれば、歴史家の科學的任務は只事實及び事實關係の確定であつて、その以上に涉る總て、かくして殊に「歴史的に重要なもの」の選擇は藝術であつて科學ではないといふことになる。かゝる見解がランケ以後ドイツの史家に抱持されて居つたのである。之に對して非常な變革を與へたのはハインリッヒ・リツカートである。

（ 7 ）  
リツカートは歴史的抽象といふ特殊の問題を非常に明瞭に認識し、構成したが、同時に歴史方法的研究には少くとも特殊の問題の存在することを示した。彼は自然科學の總括的な觀念構成に對立する歴史的觀念構成を物語るのである。彼はこの歴史的觀念構成なるものは個體化されたもの即ち個體に向けられた認識の現實的改作であると見、而して個體化的な歴史的觀念構成なるものが、科學的妥當性

によつて完成さるべき明白な眼點を問題としたのである。先づ史家がその選擇方法を決定するのは明瞭に其人の趣味なるが故に、この選擇には指導的趣味が一般妥當であり、結局規範的な、一般妥當なものであれば、それが客觀的にも妥當であり、即ち吾人に實際に存ぜねばならないものと考へた。かくて彼は觀念構成は價值關係的な抽象であり、常に事實材料から或る價值、結局絶對妥當な價值と關係を有する要件が選擇されて、歴史的個體觀念に結合されるのであるといふ理論に到達した。而してかゝる「あらねばならない」價值は國家・法律・藝術・宗教・科學等の如き文化價值であり、この種の價值に關係してゐるものが歴史的に重大なものであるといふ。然して指導的價值は吾人に絶對妥當のものとして現るるから、かゝる特質を捕捉し綜合する歴史的觀念に客觀的に妥當なものであるといふ。

リツカートは最初からして個體化的認識の問題を全然歴史的抽象の上に立てゝゐるといふことについては何人も見通し得ない、かくてまた彼が考へてゐる如き個體化的觀念構成の本質から、特殊の意味で、歴史の對象の限界並に規定を引出す試の爲されることは當然である。即ち若し、個體的認識が價值關係的抽象でありとすれば、その最自然的な對象は明白に意志し、行爲する主體が絶對價值の實現に努力する範圍でなければならず、而して此範圍は人間の文化生活であるからして、歴史は文化史でなければならぬといふ「純論理的」な方法が生じて來るのであつて、この學説は非常な勢を以て學界を風靡し、近代に至るまで、その勢力が残在した。吾人は今先づ此學説について検討を試みなければならぬと思ふ。

ればならぬと思ふ。

バウル・バルトはリツカートを評して、「彼は歴史に關するカントの學説の半分を改めた」といふてゐるが、少くとも彼は新カント學派としてドイツ西南學派の歴史哲學を大成したといひ得る。實に彼の後世に及ぼした影響は注目に値するもので、その思想は明かにトレルチ及びウエーバーに求むるを得べく、ハー・マイエル及びシブランガーなどは特に強い刺激を受けて居り、又その反作用はジムメル及びデルタイに及び、シュナイドライ、マイネツケ、ゴドル及びリエンフィールト等も相當な感化を被つてゐるといひ得る。

彼が紀元一八九六年に公にした *Die Grenzen der Naturwissenschaftlichen Begriffsbildung* は從來問題となつてゐた自然科學と文化科學との分類に明瞭な説明を與へたもので、論理學上から歴史科學の立場を詳述し、實に劃期的作物と稱し得べきものであるが、その後紀元一九〇四年クノー・フィツシャーの第八十回誕生紀念論文の出版に際し、ウインデルバンドの勧誘によつて、彼の歴史哲學概説が公にされた。この書は紀元一九〇七年に再版され、この際多少の變更の加へられてゐるのを見るが、紀元一九二四年に出した第三版には可成り書き改められて居り、殊に彼が其序文に斷つてゐる如く、第一章の第二節、自然と精神、第六節、史的方法と史的材料の章は著しく變更された譯である。勿論か

ゝる改正によつても、彼の歴史哲學の根本的内容には更に變化のないことはいふまでもない。然し彼がかゝる訂正を爲さざるを得なかつたのは、そこに重大な理由が存するのであつて、時代の哲學的思潮の變化が彼をして彼の學説を辨解し、擁護する必要を生ぜしめた爲であり、この點がまた私に取つては特に深い交渉を感ずる所である。

リツカートの最初にかの書を出した時は、新カント派勃興の時代であつて、ドイツ西南學派の哲學思想が學界を風靡してゐたのであつたが、勿論彼等の觀念的思想に對して自然主義的傾向も相當有力であつて、彼がマルクス主義や、實證主義の存在を無視するを得なかつたことはいふまでもない。然しその後には於ける社會學派の勢力、ついでデルタイ一派の生哲學の勃興に對して漸次西南學派の思潮が衰頽し來り、リツカートを談ずるものが大分減少するに至つたことは事實である。

かくてリツカートのその歴史哲學第三版の序論に「ユームの理想主義が斷乎として除去するを得なかつた啓蒙時代の自然主義を再び征服せんとするものか、若くは新しいシトルム・ウント・ドラングに對し、それなくば到底科學の成立せざる如き嚴密な概念的思惟を擁護するものであつた。新しいシトルム・ウント・ドラングは十八世紀に一面的悟性によつて、直接的直觀若くは感情の反動として呼び起されるものや、今日再び特に『生哲學』中に現れゐる如きものをいふ」といふて居り、此文句中

「若くは」より以下は第二版までにはなくして第三版に至つて加へられたものであり、明かにデルタイ一派に食つてかゝつたものである。吾人はかの時代をシトルム・ウント・ドラング時代と見る彼の觀察が果して正當なりや否やは、新しいフマニズム派たるブルダツハ、エーゲル、シュブランガー及びリット等の著書に委することとして、こゝには彼をしてかく言はざるを得ざらしめた時代の變遷を考慮せざるを得ないのである。吾人は今リツカートの哲學が現在までにどれだけの動搖を來たしその歴史哲學にどれだけのひびが生じたかを考察したのである。この際吾人はリツカートのその歴史哲學第三版に追加した詞「我々はつまり過去を知らねばならない。そしてたとひ路を過去に取るともその際たゞ學としての哲學をのみ追求するのである。我々が過去の哲學を學ばんとするのは、それだけ明かに過去の哲學を克復せん爲である。かくの如くにして、ことに前代の歴史哲學が除外され現代の歴史哲學の諸問題に關する體系的な説明が試られる」を思ひ起さざるを得ない。吾人の考もまた實にここに存する。

リツカートの歴史哲學は勿論歴史的認識を目的とするもので、それが歴史の論理學、史的生活の原理、普遍史といふ三篇から成立してをり、其關係は非常に廣汎に涉つてゐるのであるが、吾人の問題とするものは主として史的價值關係に關するリツカートの學説である。

彼は其著のグレンツェンの中に「研究がこの問題に置かれるか、かの問題に置かれるかによつて、材料の實際的特性から、方法學的相違が生ずるのである。歴史哲學に於いて方法論の研究すべき所はその科學がその概念を如何なる風にするかにある。この際方法論は材料の内容如何を離れてその改造にのみ注目せねばならない。吾人の知り得る事件の總てが歴史であるといふのではない。歴史家はそのもの内容上自分に取つて本質的なものを選択せねばならないが、かゝる撰擇及び改造の根底には一つの原理が必要である。凡そ個別的なものはたゞ價值に關してのみ本質たるを得る。従つて價值的結合を除外するならば、現實體に對する史的趣味及び歴史其物は除去されて終ふのである」といふてゐる。

リッカートの歴史哲學の根柢が認識論と價值哲學に存することはいふまでもないことだ。殊に價值哲學に非常な重點を置いて居り、彼の歴史哲學の序論にも「何れの場合に於けると同様、この場合も價値の哲學を研究したい」といふて居る位であるが、本書の終には、歴史哲學は先づ第一に經驗的歴史研究の思考形式が導かれる理論的價值、次に歴史的に本質的な材料の原理と意義ある形象としての歴史を統一的に組織する文化價值、最後に從來歴史の過程の中に漸次實現されて來た價值を研究するものである」といふて居り、また「歴史は幾多の科學と同様に、その學的目的其物を價值なりと假定するのみならず、尙其論理の本質にはその客體と結合された他の諸價值が從屬して居り、もしかゝる價值がなかつたならば、一般に個別化的解釋は不可能なるべく、従つてこの方面よりして歴史學の論理的構

造を理解せんとせば、價值の種類及び價值と歴史的客體との結合の方法を更に詳細に會得することが肝要である」といひ、その種類は實用的價值と理論的價值とに分たるべく、而してこの場合、問題となるものは理論的價值であつて、「歴史は總ての人々に價值として妥當するが如き價值に、或は少くとも其等の總ての人々によつて價值として理解される如き價值にその事物を結び付けることである」といひ、更に「歴史家に取つての價值の普遍性と稱するものは、多くの特殊的な價值に共通せるものを含むといふ意義に非ずして、歴史がその客體を總て歴史と交渉を有する人々に價值として妥當し、或は少くとも價值として總ての人々によつて理解される價值に關係づけることである。かく客體を價值に關係づけることが個別化的解釋に導くものである」といひ、更に「歴史家がその客體を個別化的に關係せしむる普遍觀念に對して評價的態度を取るのは歴史の論理の本質の上に決定的意義を有するものではなく、心理的假定に屬するものである」といふてゐる。かくて彼は其序論に「今や殊に歴史の本質に關するあらゆる理解を不可能にする廣く流布されてゐる價值觀念の解釋を破毀すべき場合に到達した。吾人は價值をたゞその抽象的普遍性に於いてのみ考へたくない。吾人は『妥當する』非實在的なものの王國、即ち價值によつて構成された『意義』の王國は價值形象が附着してゐる精神的物理的實在と同じく具體的、個別的個形象から出來てゐることを明白にせねばならない。確に哲學は『普遍的』に妥當を取扱はねばならないが、然し哲學はかくの如く妥當の義を或價值實質の抽象的な類普遍

性と混同しない様にせねばならない」といひ、價值觀念をば構成觀念と同じく普遍化的抽象の結果と見なしてゐるリットの學説について、驚嘆の聲を擧げてゐるのである。彼はまたいふ。「一切の歴史的に重要な材料は人間の文化生活と何等かの關係を有せねばならない、蓋し然る場合にのみ、吾人が之を普遍的價值に結び付けて、特殊及び個體を研究する機會が與へられる。かくして歴史に於ける本質的なるものの撰擇を指導する價值は普遍的文化價值といはるべきである」と。

吾人は從來全く混沌としてゐた史學理論をこゝまで組織立てたリツカートの功績については、彼に讃辭を惜むものではない。然し彼が問題の解決に取つた道を詳細に調査して見ると、そこには相當納得し得られないものを發見するのである。彼が歴史的觀念に關していふてゐる理論は、危險なものであり、また結局その歴史認識の上に非常に重大な觀念迷信の影響がある。殊に彼が考へてゐる個體觀念は明白な前例に従つて藝術的征服に委ねざるに具象的な殘物を留めてゐる。更に不都合なのはその價值説であつて、概して彼の「絕對價值」なるものは特有な撰擇の論點、従つて歴史的な「觀念構成」の原理に使用し得られないことである。吾人が國家・法律・經濟・宗教・藝術・科學等に關係せる總ての事實を捕捉する場合に、いつもそれに對して初めて、撰擇の問題が正當と考ふる無限の量の存在に遭遇するのであり、彼が歴史的に重要なものを事實の中から撰擇せんとする眼點をば外的

な、外部から引入るのであるから、非常に危險といはねばならない。彼の觀察によれば、實に歴史家の外部から齎す趣味が歴史的抽象を指導するのであり、かくして歴史研究家がその研究範圍を自由に撰擇する位置にある場合、自分の特に趣味を有するものによつて決定されることは確實である。然るに彼は之を問題としてゐない。更に總ての時代がその特有の問題を過去に向け、またそれによつて過去の新しい方面を發見することは正當であるが、之は歴史研究の時々の現在趣味が研究上有力な刺激たるを示すものである。解釋及び叙述其物の指導眼點は全然其材料の中より生すべきである。今リツカートの其間に立つて居つて歴史觀念構成の指導價值が常に歴史材料其物の客觀的叙述を企つべきものと考ふる。然しこゝに彼の全體の理論が珍しい矛盾に立つ。彼の全體の理論は撰擇趣味を事實眼點に従屬せしめない爲に、趣味によつて導かれる撰擇の主觀性を除去せず、却つて個體的及び變更的趣味に代ふるに絶對的なものを置くのであるが、之は撰擇上歴史的觀念の客觀的妥當を決定的な價值の普遍的妥當の上に立て、而して哲學が規範的、考證的作業によつて確立した「超歴史的價值」に取つて意義を有するものをば、歴史的として觀察してゐるのである。恰も會て一般人間的なものが絶對の權威を有する場合にも、歴史的抽象が破毀されるからといふので、主觀的趣味を除去するが如きものである。歴史的普遍化はそれが材料其物によつて要求され建設される限り、歴史材料其物に抽象的撰擇の要求と權利との存在する限り、之が只客觀的に妥當する。之が場合でなければ結局歴史は其叙述上科學的



妥當を要求することを辭すべきものと思ふ。

リツカートの失敗の根本原因は自分の取扱ふ問題を豫め完全な普遍性を以て捕捉した爲である。歴史的抽象は單に個體化の特別な種類に過ぎない。個體化は他の範圍に於いても行はれてゐるが、其場合確かに全然「價值關係的な觀念構成」を要しない、かくて個體化的認識の性質から見て、純粹に論理的に歴史的認識といふ特殊對象を演繹せんとしたのが失敗である。而してこのリツカート及び他の人々によつて互に混同されてゐる二つの問題、即ち歴史的抽象と歴史的認識との對象の規定は互に明瞭に區別さるべきもので、歴史的に重要なものに關する問題と歴史的なものの本質に關する問題とはそれぞれ別なものである。

最後に、リツカートのいふ如き普遍的價值なるものが、果して存在するかは問題である。史家は見通すことの出来ない、廣い深い多様な事件の中から歴史的なものを選ばねばならないが、ある價值の上に事件を關係せしめて、之によつて區分するとすると、歴史の科學的性質を破壊する。この價值は最高の、一般に承認されたもの、多分リツカートには倫理的なものを土臺とするとしても、主觀的行動なくしては捕捉するを得ない。凡そ價值ある史家は豫め客觀的でなければならず、かくして價值關係的史家の同情を變じない純粹な客觀的標準が研究されねばならないこととなるのであるが、そんなものは到底發見され得べきでない。